

東京都私立高校入試の動向

「2021（R3）年度 都内私立高入試の概況」

株式会社 創育 / 新教育研究協会 原 栄久 氏

2021 (R3) 年度 都内私立高入試の概況

株式会社創育／新教育 原 栄久

1. 募集校数と募集人員

① 募集校数と共学化

2021 (令和 3) 年度の都内私立高入試では**本郷**が高校募集を停止したため、外部募集校は前年度より1校少ない183校になりました。

八雲学園が共学化した中学生の高校進学に伴い女子校から共学校となり、**村田女子**が広尾学園と教育提携し女子校から共学に改編、校名を「**広尾学園小石川**」に変更しました。

② 募集人員

男女校別の募集校数と募集人員は次の通りです。

表1 男女校別募集校数と募集人員

区分	2021年度		2020年度		増減	
	学校数	募集人員	学校数	募集人員	学校数	募集人員
男子校	18校	2,705人	19校	2,806人	-1	-101
女子校	46	8,071	48	8,319	-2	-248
男女校	119	27,161	117	26,807	+2	+354
計	183	37,937人	184	37,932人	-1	+5

③ 入試区分別募集状況

推薦入試は前年度より1校減の168校で実施しました。

推薦枠の全体に占める割合は**44.0%**でした（前年度は43.6%）。

表2 入試区分別募集状況

区分	推薦入試		一般入試		計	
	学校数	募集人員	学校数	募集人員	学校数	募集人員
男子校	13	1,029	18	1,676	18	2,705
女子校	46	3,772	46	4,299	46	8,071
男女校	109	11,879	119	15,282	119	27,161
計	168	16,680	183	21,257	183	37,937
%	91.8	44.0	100.0	56.0	-	-

④ 学科別募集人員

学科別の募集人員は次の通りです。

表3 学科別募集人員 構成比は全体の募集数に対するもの

区分	普通科	専門学科	内訳				
			商業系	工業系	看護系	家政系	その他
男子校	2,705	0	0	0	0	0	0
女子校	7,383	688	280	0	35	73	300
男女校	25,661	1,500	200	760	0	40	500
計	35,749	2,188	480	760	35	113	800
構成比	94.2	5.8	1.3	2.0	0.1	0.3	2.1

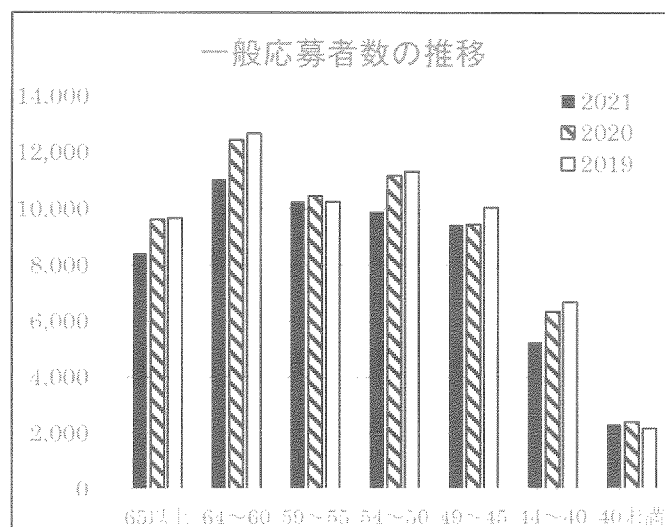
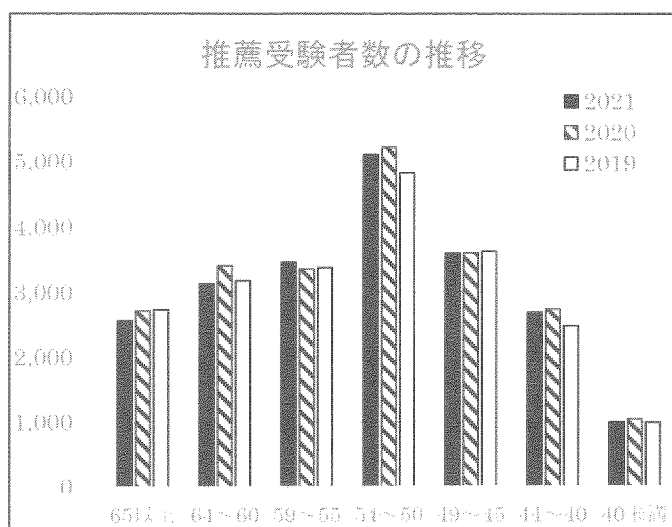
2. 学力別推薦・一般応募状況

次のグラフは、新教育調査による学力偏差値別の応募状況を推薦、一般入試に分けて集計したものです。

これを見ると、一般入試の応募者数はほぼすべての学力段階で減少傾向が見られ、生徒数減に合わせた動きになりました。しかし推薦入試の方を見ると 60 以上の上位層は減少していますが、59～55、49～45、44～40 などの中堅層では前年度並みか増加、または微減で留まっており、受験生が推薦入試に向かっているような動きが見られます。

コロナ禍によって受験勉強が十分でなく、5教科課せられる都立高入試を敬遠して内申重視の推薦入試に向かったのではないかと、そして2020年度から就学支援金と東京都の授業料軽減助成金制度の拡充がより一層私立高志向に拍車をかけたのではないかと考えられます。

とはいえ、もともと私立・通信制志向の入試になったといわれる2018年度入試より少しずつ私立推薦入試にシフトする傾向はあったので、コロナ禍の影響はむしろ推薦と一般入試の学力上位層の応募減に現れたと考えられます。つまり安全志向と、移動による感染リスクの防止です。2020年度の前半に、例年なら活発に行われていた合同相談会が軒並み中止になって志望校の研究が十分でなかったことや、何校も受験すると移動による感染のリスクが上がることから、併願校を減らして第一志望校に確実に合格したいという慎重な志望校選択を行ったためこのような応募状況になったのではないのでしょうか。



3. 各校の選抜状況

① 国立大附属

学力上位の学校が安全志向で敬遠されるのであれば、国立大附属こそ応募減になるのではないかと思われますが、次にあるように必ずしも応募者が減ったところばかりではありませんでした。むしろ減少したところも増加したところも前年度の倍率に影響されているようです。

筑波大学附属は男子が減、女子は増えました。前年度は男子の実質倍率が3.62倍から4.03倍にアップしており敬遠されたのではないかと考えられます。逆に女子は2019年度、2020年度と実質倍率2倍台で同校としては低めの倍率になったことから反動があったと考えられます。

筑波大学附属駒場は実質倍率が下降傾向で 2016 年度より 3.44→3.25→2.80→2.82→2.70 倍と推移、この 3 年間は低めの倍率であったことが応募増の要因になったと思われます。その結果、今年度の実質倍率は 3.41 倍となり 5 年前の水準に戻りました。

<国立大附属の応募者数>

学校名	性別	2019 年度	2020 年度	2021 年度
筑波大学附属	男子	393	405	341
	女子	189	191	213
筑波大学附属駒場	男子	141	143	176
お茶の水女子大学附	女子	371	298	381
東京学芸大学附属	男子	537	479	411
	女子	442	379	351
東京工業大科学技術	男女	524	455	251

お茶の水女子大学附属も前年度に応募減となり実質倍率が 2 倍台という近年にない低い倍率になったため、その反動による応募増といえます。

ただ、受験棄権率は 2019 年度より 12.1→13.1→14.2%と徐々に上がっており他校第一志望者の応募が増加傾向であることを窺わせています。

東京学芸大学附属は近年募集要項の変更を毎年のように行っているためか、応募者数は減少傾向です。繰り上げ候補者の発表によって都立日比谷が第二次募集を実施した（2019 年度）ことや、合格者に対して「入学確約書の提出」を求めるようになったことなどで話題となることが多く、応募者数に影響を及ぼしているのではないかと思います。今年度は入学辞退者の増加を予想したのか男女それぞれ 10 人合格者を増やしました（男子の合格者 110→121 人、女子 90→100 人）。

東工大科学技術の応募者数が大幅に減少しました。表にはありませんが推薦入試は前年度の 115 人から 52 人へと半減、一般入試は上記にあるように約 200 人、4 割強の応募減になりました。東工大との高大連携特別入試が 2021 年度（2022 年実施）を最後に廃止になることや、一般入試の出題範囲から「三平方の定理」が除外されなかったこと、東工大の田町キャンパス土地活用事業により高校が 2025 年度までに大岡山キャンパス（目黒区）に移転する予定であることなどが影響したのかもしれませんが。

② 都内私立高入試概況 1 難関進学校

男子、女子難関校の状況です。次ページの表は一般入試の応募者数を過去 4 年分掲載したものです。

これらの学校はもともと高い人気を得て毎年高倍率激戦になっていましたが、都立高の台頭と共学志向によって近年は選抜状況が変動しやすくなっています。そのため各校が募集要項の変更を余儀なくされています。たとえば 2016 年度に城北で推薦入試を導入、桐朋が面接を廃止したことなどが挙げられます。そして今年度は巣鴨で 5 科型入試を導入し、本郷が高校募集を停止しました。また来年度 2022 年度は豊島岡女子学園が高校募集を停止するなど男女別学の難関進学校では動きが活発になっています。

そんな中で今年度はどのような入試を行ったのでしょうか。

開成の応募者数は 2 人足りなかつただけですが 500 人を割り込みました。これだけ少ない応募者はこの 10 年間ではなかつたことです。合格者数は前年度並みにだしていることから実質倍率は前年度の 2.73 倍から 2.62 倍にダウン、これも近年ではもっとも低い倍率です。合格最低点も 263/400→242/400→233/400 点と下がりつつあります。桐朋も応募者は減少傾向で、2018 年度より 262→256→246→215 人と推移しています。215 人は最近の 10 年間でもっとも少ない応募者数です。ただ合格者を絞っているこ

とから実質倍率は 1.42→1.29→1.35→1.31 倍とおおむね安定しています。

城北は本郷の募集停止の影響を受けて応募増。合格者も絞ったため実質倍率は前年度の 1.49 倍から 1.90 倍にアップ、合格最低点も 177/300 から 197/300 点と 20 点上がりました。実質倍率の 1.9 倍は近年ではなくこれらの難関進学校では唯一実質倍率が上がりました。巢鴨は 5 科型入試に 178 人の応募者を集めました。3 科型入試が 67 人だったので 2.5 倍の数です。ただ都立や国立大附属との併願者が多かったためか合格者は 120 人以上 (121 人) としたため実質倍率は 1.38 倍で留まっています (3 科型入試の実質倍率は 1.56 倍)。

<男子・女子難関進学校の一般応募者数>

学校名	2018	2019	2020	2021
開成	537	537	522	498
桐朋	262	256	246	215
城北	316	328	327	360
巢鴨	108	118	149	245
本郷	290	304	194	募集停止
豊島岡女子学園	474	420	427	385
計	1,987	1,963	1,865	1,703

高校募集最後の年となった豊島岡女子学園は一般入試の応募者数が 400 人を割り込みました。実質倍率も前年度の 1.77 倍から 1.69 倍にダウンし、同校としては近年にない低倍率での入試になりました。推薦入試では内申基準と欠席日数による出願基準を廃止し「第一志望で合格した場合必ず入学すること」のみにしましたが、応募者は 63 人から 55 人になりました。例年推薦、一般入試ともに厳しい入試になっていたため安全志向で敬遠されたのかもしれませんが。ただ一般入試の合格点が 177/300 点から 197/300 点に上がっており、合格者の学力レベルは上昇したようです。

このようにいくつかの学校では敬遠傾向が見られました。

③ 都内私立高入試概況 2 大学附属校

では大学附属校の応募状況はどのように推移したのでしょうか。次ページの表は早慶 GMARCH の附属校の推薦受験者と一般応募者の推移を過去 4 年間分掲載したものです。推薦、一般ともに 10 校合わせた応募者は減少しました。しかし推薦入試は 119 人、前年度比 6.8%の減で留まったのに対し、一般入試は 1,081 人 13.5%の減となり一般入試の減少幅が際立っています。これらの学校では推薦入試、一般入試ともに不合格者の多い厳しい入試が続いていたので安全志向によって敬遠されたと考えられます。

そんな中で青山学院は高い人気を維持しました。推薦入試は 53 人増、一般入試が 32 人減で、一般入試から推薦にシフトしたような形になり、推薦・一般合わせた数は 1,240 人→1,261 人とほとんど変わっていません。立地もよく施設設備が充実しており、かつ英語教育に定評があることがコロナ禍にあっても多くの受験生が集まる要因になっているようです。新校舎建設のため仮設校舎の生活になっている明治学院からの移動もあった可能性があります。

しかし、中央大学杉並が推薦 51 人 12.5%の減，一般入試が 167 人 15.0%の減になったほか，中央大学附属の推薦が 41 人 13.5%，一般 90 人 13.9%，中央大学は推薦が 58 人 23.7%，一般 191 人 21.9%の減と中央大学系の附属校が軒並み応募減になりました。中央大学杉並と中央大学は前年度に推薦，一般入試ともに実質倍率が上がって厳しい入試になったのでその反動といえますが，中央大学附属は 2 年連続で応募減となり一般入試の実質倍率が男子 4.40→3.16→2.72 倍，女子 5.87→3.78→3.61 倍と下降傾向です。例年これらの 3 校は学校間で受験生の行き来があり応募者が増減することがよくありますが，3 校とも推薦，一般入試両方でそれぞれ 1 割以上の応募減になったのは近年ではありません。

さらに早稲田実業が推薦 32 人 24.2%の減，一般が 185 人 18.0%の減，国際基督教大学の一般が 34 人 11.9%の減，早稲田高等学院の一般が 343 人 18.5%の減になっており，難関大学附属校の敬遠傾向は明らかです。早稲田実業の一般入試応募者が 800 人台まで減ったのは近年ではありませんし，早稲田高等学院も 1,500 人台は最近の 10 年間ではなかったことです。

<難関大学附属校の状況>

学校名	推薦受験者				一般応募者			
	2018	2019	2020	2021	2018	2019	2020	2021
青山学院	189	228	220	273	974	909	1,020	988
中央大学杉並	268	324	407	356	851	974	1,115	948
中央大学附属	303	423	303	262	680	868	646	556
中央大学	170	202	245	187	675	692	872	681
早稲田実業	139	154	132	100	994	1,080	1,028	843
明治大学付属明治	131	116	101	105	786	779	581	557
国際基督教大学	—	—	—	—	351	416	286	252
早稲田高等学院	255	249	236	235	1,913	1,841	1,850	1,507
学習院	—	—	—	—	157	113	141	143
慶應義塾女子	109	119	113	120	467	490	471	454
計	1,564	1,815	1,757	1,638	7,848	8,162	8,010	6,929

一方，明治大学付属明治は推薦入試は微増で，一般入試も 24 人 4.1%の減で留まりました。しかし前年度の応募者数が同校としては少ない人数であったため増えるはずが増えなかったといえないこともありません。学習院は前年度並みの応募者を集めており一見高い人気を維持しているように見えますが，受験棄権者が年々増えています。受験棄権率は 2018 年度より 18.5→21.2→25.5→28.0%と今年度は 3 割弱まで上がりました。さらに併願者の受験も多かったのか合格者数も前年度より 6 人多い 34 人出したため実質倍率は 3.75 倍から 3.03 倍にダウンしました。

このような中で安定した入試を行っているのが慶應義塾女子で，この 4 年間の実質倍率は推薦が 4.36→5.17→4.52→5.00 倍，一般入試が 3.36→3.73→3.31→3.37 倍と一般入試はほとんど動いていません。学力上位の女子校は学校数自体少なく，選択肢が限られていましたが 2022 年度に豊島岡女子学園が高校募集を停止するとさらにこの慶應女子に集まってくるのではないかと予想されます。

次の表も都内の上位大学附属校の状況です。これら 10 校合わせた数でいうと推薦入試は前年度の数を維持したものの、一般入試の応募者は約 600 人減となりここでも敬遠傾向が見られます。しかしその多くは前年度の選抜状況の反動とみられ、コロナ禍による安全志向で激戦校を避けたという見方もできますが、そうでなくても応募減になったであろうと思える学校もありました。

帝京大学高等学校は応募者数が増えたり減ったりしており、今年度は増える年に当たっていましたが、逆に 93 人 19.6%の減になりました。併願優遇制度がありますが、加点方式のため不合格者がでていること、帝京大学グループに属していながら難関大学進学を目指し帝京大学に進学する生徒がほとんどいない実質的な進学校であることなどが影響したのかもしれませんが。明治大学付属中野八王子は推薦入試で 55 人 13.2%、一般入試で 108 人 19.5%の減になりました。もともと毎年激戦が繰り広げられる学校で、推薦入試の実質倍率は 2017 年度より 3 倍台が続き、一般入試は 4.19→7.32→5.52→5.56 倍と推移していたことが応募者数に影響したと考えられます。この結果、推薦入試は 2.99 倍に、一般入試は 4.08 倍に下がりました。

<上位大学附属校の状況（1）>

学校名	推薦受験者				一般応募者			
	2018	2019	2020	2021	2018	2019	2020	2021
帝京大学	—	—	—	—	497	517	475	382
明治大学付属中野八王子	381	372	417	362	583	449	553	445
法政大学	141	134	134	169	458	402	331	431
國學院久我山	39	39	45	65	338	305	293	296
成蹊	—	11	20	39	237	197	142	195
明治学院（推薦は応募数）	246	286	388	354	1,001	1,027	1,120	956
東京都市大学等々力	—	—	—	—	170	209	360	216
明治大学付属中野	25	20	19	24	1,026	1,056	1,158	935
芝浦工業大学附属	31	53	34	58	98	159	104	123
東京農業大学第一	73	92	103	87	617	544	661	596
計	936	1,007	1,160	1,158	5,025	4,865	5,197	4,575

明治学院の推薦応募者は前年度に 102 人 35.7%の大幅増となり実質倍率が 1.97 倍から 2.59 倍へと大幅に上がったため、今年度は 34 人 8.8%の減になりましたが、それでも高い人気を維持しています。しかし一般入試の応募者は 5 年ぶりに 1,000 人を割り込み、実質倍率が 3.88 倍から 3.22 倍へとやや緩和されました。しかし 1 回目の 2/10 の応募者数は 32 人 5.2%の減で留まったのに対し 2 回目の 2/18 で 132 人 25.9%の大幅減になっており、私立併願者の受験校数が減少していることを示しているような動きになりました。2022 年夏には新校舎が完成することから来年度は応募増の可能性が高いと予想されます。東京都市大学等々力は一般入試の応募者が前年度に大幅に増加したことから、今年度はその反動で 144 人 40.0%の減となり前々年度並みに戻りました。青稜や朋優学院などに移動したのかもしれませんが。しかし実質倍率は前年度の 1.18 倍から 1.25 倍へと若干ですが上がっています。明治大学付属中野は明治学院同様、5 年ぶりに応募者が 1,000 人を割り込みました。前年度に実質倍率が 4.01 倍と近年にない厳しい入試になったため敬遠されたようです。芝浦工業大学附属は前年度に男子の推薦基準をアップし、

一般入試日を2/12から2/10に変更したため応募減になり、一般入試の実質倍率が5.03倍から2.67倍へと大幅にダウンしたことから、今年度は19人18.3%増えて実質倍率も3.97倍に上がっています。

東京農業大学第一は推薦Aの基準を廃止し、推薦Bの基準を出願基準として内申による加点制度を採り入れ、内申の加点項目から「生徒会役員、課外活動の実績」を廃止したことから、推薦入試は16人15.5%の減、しかし一般入試は第一志望優遇の加点幅を拡大したため応募者は65人9.8%の微減で留まりました。

一方、応募増になった学校を見ると、これも前年度に倍率ダウンした学校ばかりでした。難関大学附属校を敬遠した受験生の受け入れ校になった可能性もありますが、コロナ禍でなくても応募増になった可能性は高いと思われます。

國學院久我山は理系選択のみだった女子も文系選択が可能になりましたが、推薦応募者が増えたのは男子の方で、女子は理系7人から文理合わせて5人とむしろ減ってしまいました。法政大学は2018、2019年度と一般入試の実質倍率が4倍台と激戦になったことから、2020年度は約70人17.7%の応募減となり実質倍率も2倍台にダウンしました。今年度はその反動で一般入試が100人30.2%の増となり4倍台戻ったほか推薦入試も35人26.1%の増となりやはり実質倍率は4倍台に上がって激戦になりました。中央大学杉並や明治大学附属中野八王子などから移動してきたようです。成蹊は2016～2018年度の3年間の応募者数は230人台で安定していましたが、2019年度に推薦入試を導入すると応募者が減り始め、2019年度は40人16.9%の減、2020年度はさらに55人27.9%の減となり実質倍率も1.63→1.38→1.25倍と下降傾向になっていました。しかし今年度は推薦入試の募集数を約10人から約15人に増やしたこともあり受験者がほぼ倍増したほか、一般入試も53人37.3%の大幅増で実質倍率が2.02倍に跳ね上がり近年にない厳しい入試になりました。これも前年度の低倍率の反動で中央大学系などからの移動があったと思われます。

さらに大学附属校の状況を見ていきます。以下の大学附属校でも前年度の選抜状況や出願基準、募集要項の変更によって応募状況が変動する学校が増えています。中にはコロナ禍によって選抜方法を変更し、その結果として応募数が動いた学校もありました。難関大学附属敬遠者の受け入れ校になったケースも否定できませんが、それでも通常の動きの範囲内で留まっています。

拓殖大学第一は一般入試の応募者が2年連続で減となっていました。今年度は普通コースの併願基準を緩和したことや、コロナ禍による特別措置として全員に内申加点を行ったことから390人23.2%の増となり2,000人台に回復しました。桜美林は前年度並みの応募者を集めていますが、1回目（コースアップ入試2/10）の書類選考の応募者が90人10.0%増加したのに対し2回目（同2/18）が59人12.3%の減となっており、ここでも私立併願者の減少を示す動きが見られました。明治学院東村山は前年度に実質倍率が2倍を超えたことから、今年度は57人25.2%の大幅減になりました。共学化した明法や武蔵野大学と競合するようになり応募者数が変動しやすくなっているようです。東洋大学京北は高校募集の定員を150人から120人に減らし、推薦と一般で内申重視型と適性（入学試験）重視型に分け、さらに加点制度のハードルをやや上げたことなどから、推薦は53人32.1%、一般は272人42.1%の大幅減になりました。東洋「特進選抜」や日本大学豊山などに移動したのではないかと考えられます。

<上位大学附属校の状況（2）>

学校名	推薦受験者				一般応募者			
	2018	2019	2020	2021	2018	2019	2020	2021
拓殖大学第一（推薦はIのみ）	143	142	134	128	2,193	1,943	1,678	2,068
桜美林	—	—	—	—	1,212	1,509	1,542	1,544
明治学院東村山	67	61	67	60	255	202	226	169
東洋大学京北	142	184	165	112	401	343	646	374
駒澤大学	293	289	357	318	785	772	887	711
成城学園	38	47	44	55	123	151	147	148
東京電機大学	44	44	49	52	278	294	238	249
多摩大学目黒	60	88	58	69	459	602	302	319
専修大学附属	218	285	332	239	472	556	568	372
計	1,005	1,140	1,206	1,033	6,178	6,372	6,234	5,954

駒澤大学も内申基準を変更しました。推薦は「3科かつ9科」の選択肢を廃止し、「5科かつ9科」のみに、併願基準は「9科のみ」から「5科かつ9科」としそれぞれハードルが上がりました。その結果、推薦は37人10.9%、一般は176人19.8%の減となっています。成城学園は推薦入試が増加傾向ですが、一般入試はこの3年間安定した応募者を集めています。東京電機大学も推薦入試は少しずつ増えており、一般入試は前年度とほぼ同じ応募者を確保しています。多摩大学目黒は前年度に加点制度の条件を厳しくしたことや、共学になった品川翔英の影響を受けたのか応募減になりましたが、今年度はその反動もなく推薦、一般入試ともに微増で留まりました。専修大学附属は推薦、一般ともに内申基準をアップしたほか併願優遇の加点制度を廃止しました。その結果、推薦は93人28.0%、一般は196人34.5%の大幅減となり、日本大学櫻丘に影響を及ぼしました。

次に日本大学系の高校を取り上げてみましょう。

大学の不祥事が高校入試に影響した2019年度はほぼ軒並み応募減となり、翌2020年度はその反動もあり多くの学校で応募者が増えて人気回復しました。今年度は次ページの表にあるように、8校合わせた一般入試の応募者は134人4.3%の微減でしたが、推薦入試の受験者数は363人23.5%の増となり第一志望者の数は不祥事が起こる前の2018年度を200人以上上回りました。ここに早慶GMARCHなどの難関大学附属校から日東駒専への流れが確認できますが、東洋大学京北や駒澤大学、専修大学附属では基準を上げたため、この日大系へ集中したような動きになりました。また首都圏の大学の定員厳格化により日東駒専の難易度が従来のGMARCHレベルに上昇するということが日大系の人気の背景にあるようです。

そんな中で日本大学第一は推薦、一般入試ともに応募者の減少傾向が続き、今年度も反動はありませんでした。併願優遇制度が設けられていないためより確実な併願校を求める受験生に敬遠され、安田学園などに流れているものと考えられます。日本大学第二は推薦入試で29人27.9%の増となって2018年度の水準に戻りました。日本大学第三も推薦入試は安定した入試が続いていますが、一般入試は54人41.5%の大幅減になりました。ここも併願優遇制度がないため桜美林に流れているものと見込まれます。

なお、2022年度には特進コースのみ併願優遇制度の復活を検討しているようです。日本大学櫻丘は推薦入試が127人50.4%の大幅増、基準をアップした専修大学や内申基準で3科の選択肢を廃止した駒澤大学からの移動があったと思われます。一般入試は私立併願を認めて入試日を2回に増やした結果倍増した前年度より90人8.8%の微減です。私立併願者が減ったのかもしれませんが。日本大学鶴ヶ丘の推薦受験者は最近の5年間でもっとも多かった一方、一般入試の応募者数は4年ぶりに500人を割り込みました。一般入試から推薦入試にシフトしたような形です。日本大学豊山が大幅増になりました。推薦入試ではコロナ禍により活動実績を中学校からの証明書で加点できるようにしたこと、一般入試では2/10と2/14の入試日程を2/12に移動したことが主な要因と思われます。

日本大学豊山女子は推薦入試でN進学のア推薦の受験者が90人から141人へ56.7%の大幅増、就学支援金の拡充によって埼玉県から生徒が移動してきたのかもしれませんが。

目黒日本大学もわずかですが推薦入試の受験者が増加しています。

<日本大学系の状況>

学校名	推薦受験者				一般応募者			
	2018	2019	2020	2021	2018	2019	2020	2021
日本大学第一	148	124	108	89	292	187	170	136
日本大学第二	139	79	104	133	439	287	387	376
日本大学第三	82	73	86	82	185	150	130	76
日本大学櫻丘	266	236	252	379	428	487	1,021	931
日本大学鶴ヶ丘	261	234	261	279	584	535	525	490
日本大学豊山	324	262	278	431	433	341	290	417
日本大学豊山女子	281	225	239	293	91	65	96	81
目黒日本大学（日出）	(183)	190	218	223	(414)	526	478	456
計	1,684	1,423	1,546	1,909	2,866	2,578	3,097	2,963

④ 都内私立高入試概況3 共学化

2021年度は八雲学園が高校募集を男女共学へ、また村田女子が広尾学園との教育提携を行い、女子校から共学に改編したほか、学校名を「広尾学園小石川」に変更しました。2022年度は星美学園が校名を「サレジアン国際学園」に変更して女子校から共学校になる予定というように毎年数校が共学校に衣替えしています。今年度共学になった学校はどのような入試になったのでしょうか。ここ数年に改編された学校も含めて見ていきましょう。

八雲学園は2018年度に中学校を男女共学にし、その生徒が高校に進学するタイミングに合わせて共学にしました。もともと中学入試が中心で高校募集は小規模な上、内申基準をアップしており、しかもコロナ禍によって共学化の情報が受験生や保護者に浸透しなかったためか、推薦入試の受験者は前年度より減ってしまいました。ただ一般入試の応募者は大幅に増加しています。広尾学園小石川は推薦入試が9人20.5%の増、一般入試は倍増しました。前評判から予想された人数よりずいぶん少ないようですが、内申基準をそれまでの特進より高めに設定したことや、新中学入学生が高校進学時に高校募集を停止する予定であることが影響したと思われます。

<共学化した学校の状況>

学校名	推薦受験者				一般応募者			
	2018	2019	2020	2021	2018	2019	2020	2021
八雲学園	13	9	11	6	10	6	8	20
広尾学園小石川	48	39	46	53	152	110	120	244
品川翔英	53	47	103	417	98	80	416	1,285
武蔵野大学	106	141	308	114	127	146	436	214
武蔵野大学附属千代田	72	68	205	121	95	84	193	167
明法	69	187	64	112	101	382	237	210
文化学園大学杉並	93	111	87	106	415	620	319	376

品川翔英が共学化 2 年目に爆発しました。高校募集の定員は 300 人ですが、推薦入試だけでそれを 100 人以上上回る受験者を集め、一般入試の応募者も前年度の 3 倍となり定員の 2 倍強の入学者を迎えることになったようです。現在新校舎の建設工事中ですが学習環境が懸念されます。また来年度の入試では相当ハードルが上がりそうです。武蔵野大学は共学化初年度の 2020 年度に高校募集人員 250 人を大幅に上回る 400 人以上の入学者を迎えたことから 2 年目の今年度は本科コースの基準をアップしました。その結果、上記のように落ち着いた応募状況になっています。武蔵野大学附属千代田は共学化初年度の 2019 年度は募集の核をなす LA コースと MS コースを女子のまま残し、2020 年度に完全共学化した後、2021 年度に「選抜探究」「附属進学」の 2 コースに集約しました。「附属進学」の基準が従来の LA よりやや高めのため応募者はやや減少しましたが、前年度に高校募集 200 人に対し 300 人近い入学者があったため絞らざるを得なかったようです。共学化 3 年目の明法は初年度の 2019 年度は高校募集 90 人に対して 230 人入学、そのため 2020 年度は基準をアップし高校募集枠を 115 人に増加、これに対し 110 人が入学しました。そして 2021 年度は加点制度を拡充し、得点加点の基準を緩和しましたが推薦入試の受験者は増加したものの、一般入試は減となりました。

文化学園大学杉並も共学化の後には変動の激しい入試になっています。2018 年度の共学化初年度は基準を緩和して臨み、その結果高校募集の定員 200 人を 45 人上回る 245 人の入学者を得ました。2019 年度は基準を据え置いて定員の変更を行いました、320 人の入学者を迎えたため 2020 年度に基準をアップ、入学者は 230 人に減り、そして今年度はまた緩和し推薦、一般入試ともに応募増になりました。

このように共学化により応募者数が急激に変動することから、内申基準を中心とした選抜方法を変更することが多くなります。

⑤ 都内私立高入試概況 4 進学校

次に進学校の状況を見てみましょう。まず 23 区の学校です。

まず錦城学園ですが、推薦、一般入試ともに大幅に減少しています。推薦入試の受験者は半分以下になりました。これはコロナ禍の影響ではなく内申基準を上げたためです。2019 年度にそれまで男女別だった基準をそろえ、女子は実質緩和になりました。その結果、募集人員 240 人に対し 370 人ほどの入学生を迎え、男女比が 58 : 42 から 48 : 52 へと男女逆転しました。2020 年度も同様の傾向が続いたため今年度は基準を上げざるを得なかったものと考えられます。東洋は前年度の高校募集 320 人のところ約

480 人の入学生を迎えたことから、今年度は特進と総進の推薦基準を上げ、さらに特進の併願優遇制度を廃止しました。その結果推薦、一般入試ともに応募者は減少しています。青稜は併願優遇を書類選考に変更しました。神奈川県からの受験生が多い学校で全体の約 6 割を占めています。県内では書類選考の入試を実施している学校が多く、受け入れやすかったためか応募者は大幅に増加しました。

朋優学院は前年度に基準をアップしたため推薦入試は半減、一般入試は 732 人 27.5%の大幅減となりました。今年度は応募者の多い国公立コースの定員を増やし基準を据え置いたため、推薦入試は元に戻り、一般入試は 320 人 16.6%の増加となりました。しかし前々年度の数に届かなかったのは青稜の影響を受けたからかもしれません。駒場学園は 2020 年度に内申基準に 9 科の選択肢を追加したため推薦、一般入試ともに大幅な応募増となりましたが、今年度はまた 9 科を外したため応募者数も元に戻りました。目黒学院はアドバンスとスタンダードの推薦の基準をアップし応募減。駒込は特 S コースの内申基準から 9 科の選択肢を廃止しましたが、応募者は微減で留まっています。SDH 昭和第一は推薦、一般入試ともに減少しました。推薦入試は豊島学院の影響でしょうか。一般入試はフリーの応募者が減っており併願優遇の利用者は 4.5%の減で留まっています。フリー受験者の減はコロナ禍の中で確実な併願校を選択する生徒が増えたことを示唆しています。東亜学園は推薦のみ加点項目に「部活動 3 年間継続」を追加したため増、一般入試は前年度並みの応募者を集めました。実践学園は併願優遇の 5 科の基準を上げましたが応募者は増、しかしここもフリーの受験者は減少しています。

杉並学院も応募者が減少しています。募集要項の変更としては併願の 3 科基準への加点を廃止していますが、そのためというより文化学園大学杉並の基準緩和の影響の方が大きいと思われます。豊島学院は基準を緩和しました。豊南は特進コースの内申基準に 9 科の選択肢を追加したほか、特待Ⅲの基準を緩和しました。併願者は微減となりましたが、単願での希望者が過去最高を記録したということです。関東第一は基準を緩和した駿台学園や修徳への移動があったのか推薦、一般入試ともに減少しました。

<進学校の状況 (23 区)>

学校名	推薦受験者				一般応募者			
	2018	2019	2020	2021	2018	2019	2020	2021
錦城学園	96	212	240	95	280	549	496	182
東洋	350	448	581	517	586	835	1,026	914
青稜	—	—	—	—	1,180	1,039	866	1,417
朋優学院	95	135	76	133	1,805	2,661	1,929	2,249
駒場学園	92	87	151	141	1,093	1,061	1,671	1,180
目黒学院 (共学部)	71	89	91	68	517	794	788	493
駒込	402	390	506	485	526	634	698	636
SDH 昭和第一	187	246	195	158	667	747	712	617
東亜学園	156	149	88	154	905	696	552	579
実践学園	134	130	130	130	601	492	367	396
杉並学院	73	94	130	105	856	1,212	1,232	843
豊島学院	129	128	152	173	779	806	735	889
豊南	136	115	154	195	727	741	771	738
関東第一	739	731	804	638	1,718	1,617	1,533	1,388

次に多摩地区です。

八王子学園八王子は応募減，コロナ禍によって遠方からの受験者が減少したということです。八王子実践は都外生向けに書類選考型入試を導入，一般入試日を2回から3回に増やし，併願優遇は面接を廃止するなどの変更を行いました，文理選抜と文理進学の実績で内申基準を文理選抜に合わせたこと，総合進学の基準を上げたことで一般入試の応募者が502人22.6%の大幅減になりました。しかし推薦入試は14人7.6%の微減で留まり，基準を上げて高い人気は維持したといえます。昭和第一学園は推薦，一般入試ともに応募増，八王子実践「総合進学」と基準に近い総合進学コースの応募者が300人24.7%増えているので，同校からの移動があったと思われます。なお，昭和第一学園は2022年度より工学科の募集を停止し普通科専一校になる予定です。錦城は進学コースの応募者が推薦，一般入試ともに減少しました。推薦は前年度に定員（120人）を大幅に上回る166人を集めたのでその反動と思われます。特進コースの応募者は微減で留まっているので進学実績に対する期待は高いままのようです。大成は推薦，一般入試ともに増加，特進コースで特待ランクの得点を一部緩和したことが影響したのか前年度ゼロだった推薦入試に5人が受験しました。

以上のように，従来と同じく選抜方法の変更による変動があったほか，コロナ禍によって近場の学校を選択したり，安全志向により確実性を求めてフリー受験者が減少するなどの動きも見られました。

<進学校の状況（多摩地区）>

学校名	推薦受験者				一般応募者			
	2018	2019	2020	2021	2018	2019	2020	2021
八王子学園八王子	—	—	—	—	1,449	1,455	1,344	1,104
八王子実践	122	118	185	171	1,935	1,594	2,219	1,717
昭和第一学園（普）	147	155	157	190	1,791	1,848	1,726	1,995
聖徳学園	33	22	25	35	446	320	302	318
錦城	140	154	208	160	1,172	1,182	1,276	1,208
大成	212	220	213	237	1,109	856	831	851

4. 入試トピックス

地区	学校名	内容
目黒区	トキワ松学園	2022年度より特進と進学を統合して文理探求コース新設
世田谷区	下北沢成徳	2022年度よりグローバルエデュケーション（GL）コースとブロードエデュケーション（BR）コースの2コース制に
杉並区	日本大学鶴ヶ丘	2022年度より普通科普通コースを普通科総進コースに変更予定
杉並区	日本大学第二	2022年度より募集人員を拡大予定
北区	星美学園	2022年度より男女共学化，校名を「サレジアン国際学園」に変更
豊島区	豊島岡女子学園	2022年度より高校募集停止
江東区	中村	2022年度よりコース改編予定
八王子市	共立女子第二	2022年度より英語コース新設予定
武蔵村山市	拓殖大学第一	2022年度より普通科普通コースを普通科進学コースに変更予定
武蔵野市	藤村女子	2022年度よりコース改編予定
小平市	白梅学園	2022年度よりコース変更予定

